

木曾義仲・巴御前・宮崎太郎 研究会

笹川だより4号にて既報しましたように、木曾義仲、巴御前、そして地元豪族・宮崎太郎の研究会が発足しました。

今回は、その後の研究成果の資料を提供して頂き掲載しました。(出典等は文字数の関係から省略)

源平の争乱時代に想いを馳せる

平安時代に勃発した保元の乱は、皇室、摂関家の権力争いに武士が加わって崇徳上皇派と後白河天皇派に分かれて戦った骨肉の戦いでした。

結果は、後白河天皇派(藤原忠通、源義朝、平清盛、重盛、)の勝利となりましたが、この時の恩賞授与の差別やその後の源氏側に対するいじめで源義朝の不満が爆発して平治の乱が起きました。平治の乱は源氏側の勝利で始まりましたが最終的には平氏の勝利で終わりました。

このときの戦後処理で清盛が義朝の子供たちを清盛の母の助言、その子らの母親である常磐御前の頼みに屈し命を助けました。

その後、20年と言う歳月を得てまさか平家一門が滅びることなど夢にも思わずに...

そして1980年(治承4年)以仁王(もちひとおう)が平氏追討の令旨を全国の源氏に発せられ、頼朝が伊豆で、義仲が木曾で挙兵し源平の争乱が始まることになりました。

その争乱期に、義仲がなぜ笹川に？

義仲は、笹川に逃れてきた以仁王の遺児の宮を擁護し、以仁王挙兵を継承する立場を明示する目的と、頼朝と結んで南信濃に進出した武田信光ら甲斐源氏との衝突を避けるために頼朝・信光の勢力が浸透していない北陸に勢力を広め北陸道から京を目指す為でした。

竹内 俊一さん曰く、

「ああ、ここは昔の源平合戦の頃の一つの事件の通過した土地なんだなあ」

「この森もかつて木曾義仲に伴われた、北陸宮が歩かれたのかなあ」

との感慨にふけてほしい。

そうすれば、この風景は山深い木曾谷、兵を揃えた信州諏訪大社の森の風景につながり、激しい戦だった倶利伽羅戦や堂々と進んだ都大路につながり、源平争乱の時代を味わうことにもなるうか。

神々の里 笹川

古代から日本の神様とは日常人々の目には見えない存在だが、祭りなど特定の日に、ご来臨をお願いすると、天上から雲に乗って降臨する。そびえる山頂や大岩、大樹や泉などに神霊が依りついて御神体となって拝む人々の願いを聞かれたと考える磐座信仰(いわくらしんこう)というものがあつた。

笹川には、この古態の遺跡がいくつか見られる。笹川上流にそびえ立つ磐の腰山、産土(うぶすな)神山などの岩山、諏訪山とその山頂の大岩と泉。笹川下流の御溝川と本流の合流点にあつたといわれる淵尻の大岩など、それぞれが先住の人々の磐座信仰の対象となつていた。

平安時代も後半になると、「神も仏」も共に尊いものとしてあがめようとする「神仏習合の思想」が出て神社の境内に仏を祀る寺院を設ける例が現れた。笹川の諏訪神社は、磐座信仰を基にした形だが、その境内には神宮寺(正覚寺の前身にあたるか)を設ける形となる。これに次いで、日本の神様はインドの仏様が、日本の衆生を救うために権現されたとする「本地垂迹思想(ほんじすいじゃくしそう)」がでてくる。笹川では神の降臨する磐の腰より、身近な山を選び神様の住む山と考えて「権現」と呼ぶようになって今に伝えられ、御射山祭の神の山として拝まれた。



笹川より望む城山 (アンテナ付近が本城跡)



北陸宮の御墳墓と宮崎太郎の供養塔 (宮崎城跡に建立)

御墳墓は、昭和45年7月嵯峨御所のご厚意により御分骨を受けて、このゆかりの地に奉築されました。

①以仁王、平氏追討の令旨を発する

平家の横暴に怒られた後白河法皇の第二皇子以仁王が、全国に平氏打倒を命じる令旨を発し、義仲の叔父・源行家が諸国の源氏に挙兵を呼びかけ、天台宗総本山園城寺で兵を挙げたが、平清盛の早い攻撃のため敗れ、宇治まで逃れて戦死された。

②以仁王の遺児宮出家の上、潜伏

以仁王には奈良の旧常興寺領に一人の遺児の宮がおられたが平氏の追捕を恐れ出家の上、潜伏された。

③義仲、佐久郡依田城にて挙兵

義仲は兵を率いて北信の源氏方救援に向かい(市原合戦)、そのまま父の旧領である多胡郡のある上野へと向かう。2ヵ月後に信濃国に戻り、佐久郡依田城にて挙兵する。

④義仲、越後に出兵

小県郡の白鳥河原に木曾衆・佐久衆・上州衆など3千騎を集結、越後から攻め込んできた城助職を千曲川横田河原の戦いで破り、そのまま越後へと進んだ。

⑤以仁王の遺児宮 北陸に向けて逃亡

以仁王の乳母夫であった公家の藤原重季に探し出されて、7月20日頃、京都を出発して北国を目指す旅の途中の25日、近江国高島辺りで平家の追捕隊に襲われ、50人程の侍が捕らえられ、残りは散りじりに逃走した。

⑥平通盛 義仲追討に出兵

平家軍を率いて京都を発し、義仲追討(以仁王の遺児宮の捕捉のため)北陸に向い、越前国境まで進んで来た。

⑦以仁王の遺児宮、宮崎到着

逃亡遺児の宮は、無事逃げのびた家臣と8月11日に越前(福井県)を通過して、**8月末に越中宮崎へ到着**して、宮崎荘の豪族・宮崎太郎の館に入られた。

このことは信濃大町の豪族仁科盛弘から義仲に知らされると、義仲は「近江高島事件」のように宮を平家側に奪い取られないように、より安全な場所で保護することを命じた。

以仁王の令旨を拝した義仲にすれば、遺児の宮を守ることは、平家討伐の大義名分を得ることで、併せて北陸武士団の結集のシンボルに推戴すると、令旨を受けたあまたの源氏側で優越の地位を持つて考えた。

そこで宮崎太郎は、城山南麓の別符にある三男の宮崎(別符)三郎館の増築による行在所の造営によって安全を確保した。

⑨平通盛と北陸軍の対峙

越前では先陣に出発した側近の大將、根井太郎行親の作戦が成功し、越前国の住人稲津新介実澄などと協力して敦賀で勝利した。そのため北陸はしばらく静かになった。

⑩諏訪神社の創建

手始めには、宮の還俗と元服を行う祭場作りである。義仲の氏神である信州(長野)の諏訪大社を分祀した。神社の創設である。(詳細は4頁)

⑪還俗式・元服式 ・北陸宮登場

これらの施設が整うと遺児の宮を世に出す式典が行われた。

寺では(故)以仁王の追悼法要と還俗式。神社では木曾義仲が元服親となつての元服式、「北陸宮」との尊称奉呈と木曾北陸軍の象徴となる推載式が挙行されて、義仲にとっては平家討伐の大義名分を手にして源氏の先頭に立ち、進軍する決意を固め、北陸からの上洛の準備はほぼ整つたと見られる。

⑫頼朝との確執

しかし、この義仲の独断先行的な行ないは、平家討伐の名分は源氏本流の頼朝にあるとする立場を乱すものだとして、源氏の嫡流宗家争いの対立を生んだ。さらに、2月、頼朝と敵対し敗れた志田義広と、頼朝から追い払われた源行家が義仲を頼って身を寄せ、この2人の武將を庇護した事で頼朝と義仲の関係は悪化するばかりであった。

頼朝と義仲の間には暗雲が漂い始める。頼朝は四万騎という関東の大軍を率いて義仲討伐のため信州に入った。戦を嫌った義仲は、嫡子清水冠者義高を鎌倉方へ人質に出すという。和議を提案して頼朝のもとに伏することとなり一件は落着いた。

そして、義仲の上洛作戦が敢行出来ることとなり進撃準備が始まった。

⑬平維盛が義仲追討に出兵

10万余騎を伴い北陸に進撃。義仲軍は、木曾軍の主力が到着していなかったため10万余騎の平家軍に打つすべもなく敗退が続く。

⑭平維盛越中に入るが敗走

平維盛、越中に入るが、義仲軍の先陣に破れ砺波山の東まで退く。更に、義仲軍の今井四郎兼平6000騎に破れる。

⑮義仲軍、倶利伽藍戦で大勝利

⑯義仲軍は安宅・篠原で平氏軍を潰滅させる

この後、平家は、安徳天皇を奉じ都落ち。

⑰義仲軍 都に入る。

⑱皇位継承問題

義仲、後白河法皇に北陸の宮を皇位に付けようと強要するも、受けいけられず対立が始まる。(詳細5頁)

⑲北陸宮、法皇に迎えられ入京。

⑳後白河法皇との決裂

(詳細は5頁)

21 法住寺殿襲撃

後白河法皇が義仲軍に京退去を命ずるが、19日に法皇の近臣らを解官するクーデターを起し勝利する。(詳細は5頁)

22 頼朝軍との戦い～最期

頼朝軍に破れ、大津で戦死。(詳細は5頁)

木曾義仲進軍路 想定図

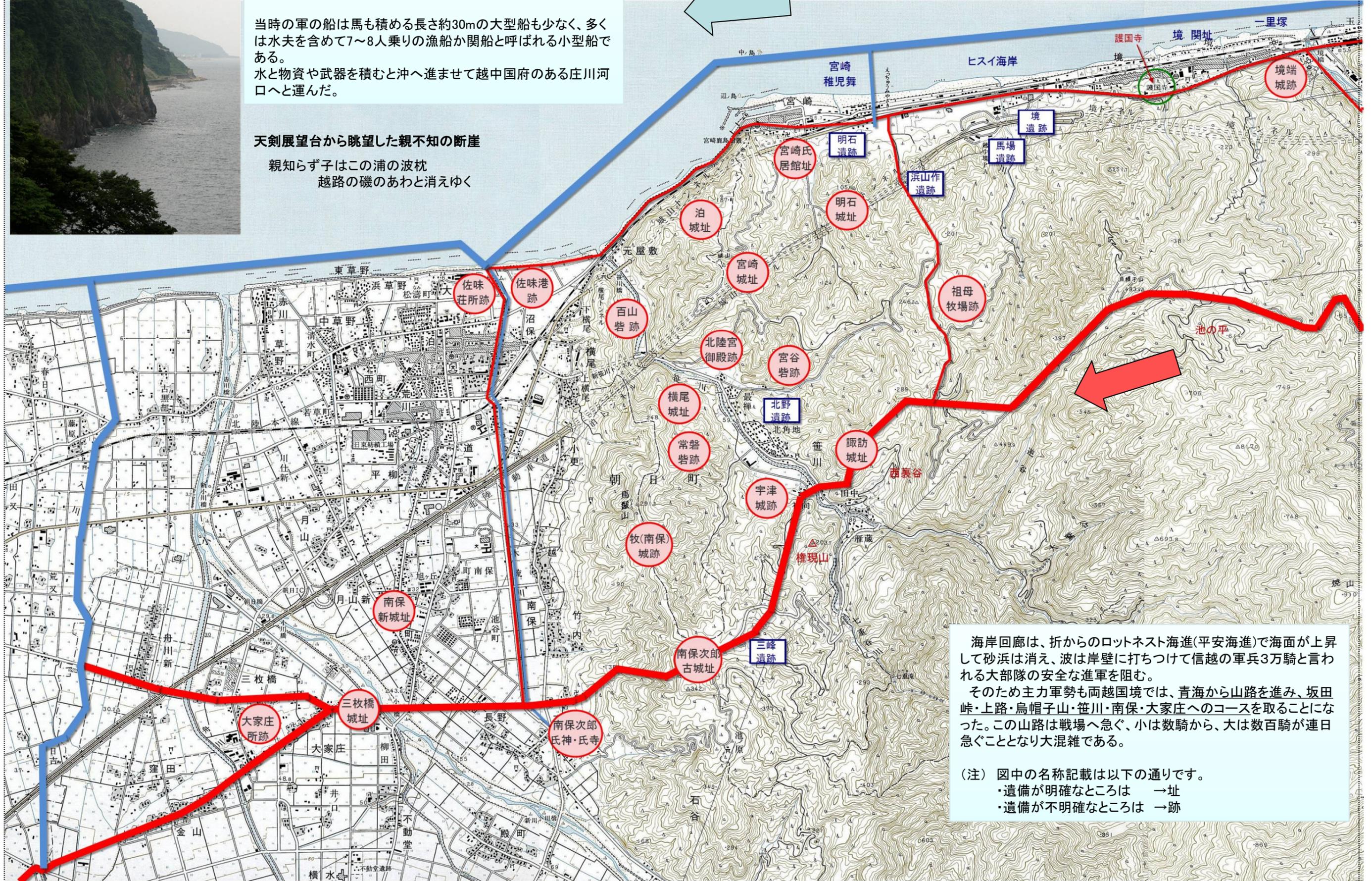


朝日町は進撃する木曾軍の中継地であると同時に物資の集結地となった。
越後国府の拠点を出発した海上隊も浦々から集めた水夫や兵士を乗せて宮崎太郎の指揮する宮崎港に寄港する。

当時の軍の船は馬も積める長さ約30mの大型船も少なく、多くは水夫を含めて7~8人乗りの漁船か関船と呼ばれる小型船である。
水と物資や武器を積むと沖へ進ませて越中国府のある庄川河口へと運んだ。

天剣展望台から眺望した親不知の断崖

親知らず子はこの浦の波枕
越路の磯のあわと消えゆく



海岸回廊は、折からのロットネスト海進(平安海進)で海面が上昇して砂浜は消え、波は岸壁に打ちつけて信越の軍兵3万騎と言われる大部隊の安全な進軍を阻む。
そのため主力軍勢も両越国境では、青海から山路を進み、坂田峠・上路・烏帽子山・笹川・南保・大家庄へのコースを取ることになった。この山路は戦場へ急ぐ、小は数騎から、大は数百騎が連日急ぐこととなり大混雑である。

(注) 図中の名称記載は以下の通りです。
・遺備が明確なところは → 址
・遺備が不明確なところは → 跡

⑩-1 諏訪神社の創建

手始めには、宮の還俗と元服を行う祭場作りである。義仲の氏神である信州(長野)の諏訪大社を分祀した。神社の創設である。

その鎮座の場所は、信州の諏訪大社と同様に東方に位して**神の山と拝される山(標高286m)**を選び、地元住民に磐座として尊ばれる大岩を御神体の本殿として、中段に神宝殿、下段の宮平には神事を挙行する拝殿と祭り広場、北東鬼門には神仏習合の考えに基づき、以仁王が平家に戦を起した際の拠点だった天台宗総本山園城寺の末院とした、「阿弥陀如来」を本尊の神宮寺を設けた。



またその北東に小里川をへだてて義仲の本陣と考えられる北角地に曲輪を設ける。最下段の笹川縁には、平常は神社の行事を執行するが、戦時には神社の警護と氏子の安全を守る武士、諏訪神家党で木曾精鋭隊の居住地の社家屋敷を設けた。大切な北陸宮となる遺児の宮の住む笹川を囲む山々を警備するのは、南が南保氏、北は佐美氏などの配置である。

ご祭神は、諏訪本社と同様に、古事記に登場する出雲の大国主命と妃神の越の沼河姫命をご両親とする建御名方富命と妃神の八坂刀売命のお二方である。

建設には諏訪大社下社大祝(諏訪神社最高祠宮)で、義仲の義父となる金刺諏訪太夫盛澄が当る。神宮寺では金刺盛澄の弟に当る、信州塩田平の手塚城主、手塚太郎別当光盛が世話をした。中原巴の名は見えないが、木曾義仲の側近として諸行事の世話をしたであろうか。

御射山祭(みさやまい)神事の遺跡

笹川の諏訪神社の創建には、下社大祝の金刺盛澄が大きく貞献した。金刺盛澄は諸書が筆をそろえて「騎戦の希代不思議の達人也」といっている。「木曾義仲を聳(婿)に取って女兒ひとり出生して、親子の契約浅カラズ」と『諏訪大明神絵詞』にある程、義仲とは深い関係があった。

この時代の合戦の多くは、馬にまたがった個人戦闘が主体で、東国の武士たちは、良馬を得ることと騎射にすぐれ、最も強力な弓を使うことに長じた。信州の武士団の強力だったのは、牧場が多くて良馬が得やすく、日頃からも訓練にはげんだからであったという。

笹川の諏訪神社でも、大祝の金刺盛澄の主催と指導で、きびしいまでの訓練と競技を行ない、対平家戦に備えたものか、平安・鎌倉時代の信州諏訪大社下社では例年の8月26日から28日までの3日間には、「山の神」を祀る御射山祭が行われた。祭りは、神に捧げる供物をとる御狩神事、武芸を競う流鏑馬(やぶさめ)、笠懸(かさがけ)、犬追いなど走る馬上からの騎射競技や奉納の芸能が行なわれたといわれる。この祭りは笹川渓谷をスタジアムとして行なった跡が、古い地名で遺されている。南東には山神様に祈る、「権現山」。御狩を行なった、「カヤバ=狩矢場」は南西の山に。神に供物を捧げた「神の上り」、騎射出発点の「オコナデ」。招待者や武士団の席の「ゴザ(御座)ダン=五十段」「ムシヤ(武者)ダン=六十段」。諏訪社人党の棧敷「シヤガ=社家」、標的となる的跡や懸け物を置いた「マト場=的場」など訪ねて見るに値することも多い。

祭りに参列した北国武士団には、加賀の林・倉光、能登の土田・日置、越中の石黒・野尻・宮崎などがあり、やがて上洛作戦を担った諸氏と考えられる。

- ・義仲が創建した諏訪神社の落慶式典で
- ・北陸宮の元服式では越中加賀の武士団を招待しての御射山祭で
- ・木曾北陸軍の結団式や出陣式、送別会や
- ・北陸軍の勝報が届くなかでの実戦練習、山岳戦練習などの華やかな式典と演技がほうふつと浮かぶ。

しかし、その指導者であった大祝の金刺盛澄は寿永2(1182)年5月の俱利伽羅戦では氷見方面の志雄山戦

で活躍した後、大勝利を見ると信州諏訪大社の旧八朔の御射山祭司祭のため、軍勢を弟の手塚太郎光盛にまかせ戦列から離れ諏訪に帰ったと記録されている。手塚太郎は、加賀篠原の合戦で、義仲を助けた斎藤別当実盛と戦うなど活躍したが、最後には都の六条河原の乱戦で果てた。金刺盛澄は、義仲戦死後は、その希代の騎戦の技を頼朝に認められ幕府御家人として仕えた。

今日、武士団の消えた笹川諏訪神社では、祭礼の日には8月26日から28日の3日間だが、武技の競い合いはなく、唯奉納芸を捧げる祭りとなったが、境内に立って笹川渓谷平野を見下ろすときに、昔の御射山祭の盛時が偲ばれる

⑩-2 宮崎(別符)三郎居館社(北陸宮の行在所)

10世紀に入ると未開墾の土地でも国司の「別符」許可を得ると、荘園の地続き分の開発が許可された。宮崎氏は早速、海岸に臨む北向きの斜面の開発に着手し、湧水のある比較的なだらかな斜面は、森林を伐採して、必要な材木を確保した跡地は水田や畑地化を図った。笹郷の開発である。城山地塊の南側山麓の上木谷流域、大溝川流域、笹川下流域である。開墾の荘官は、宮崎太郎の弟別符三郎を当てて管理させた。

三郎は名主として「別符三郎」と呼称して、居館を城山の南麓で笹川と大溝川の合流点にある平地に置いたようだ。作業は、宮崎氏の所従や下人を充当したものであろう。別符三郎は木曾軍の上洛作戦に従った。

開拓は生えている樹木の伐採したあと、水は湧くが水田化は不向きで困難な土地では、折からの「徴兵制に基礎を置く健児の制」で兵士と馬を必要とすると、戦斗での重要性が認識される牧馬の飼育が盛んに行なわれた。宮崎荘の「別符」でも各所で行なわれたようで、その跡地は「祖母谷」「馬場」「馬場山」として地名に残っている。城山が北西の風を防ぐと、海から吹く風の運ぶミネラルがたっぷり草に注ぎ、栄養を含む刈草となる。小さな牧場には都合が良かった。早くから始まったのか、治暦元(1065)年の越中国司解には「権制の家が別符を用いず好んで荘牧を立てる」と国へ訴えたほどの例もある。

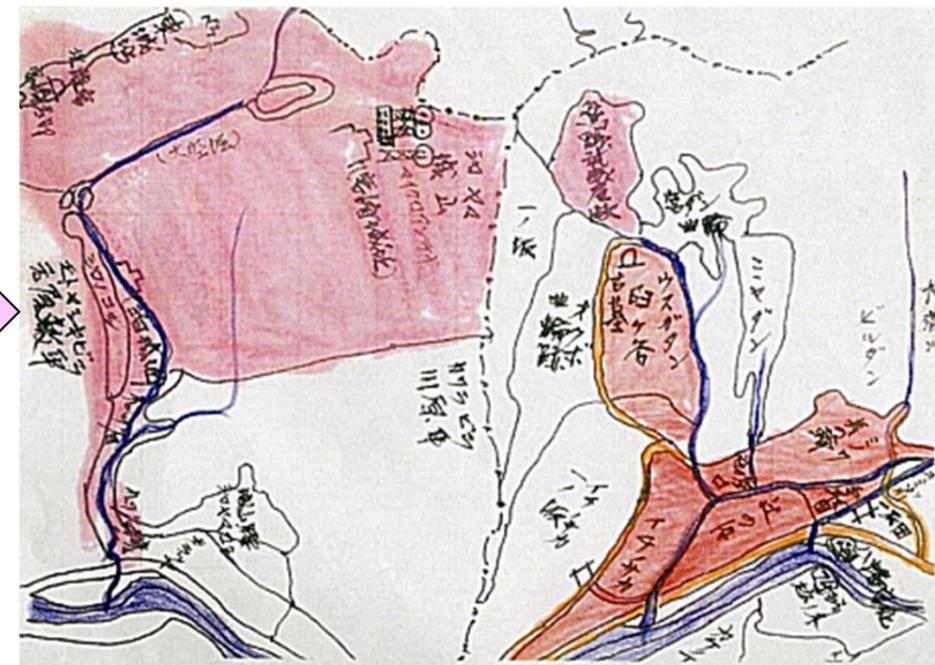
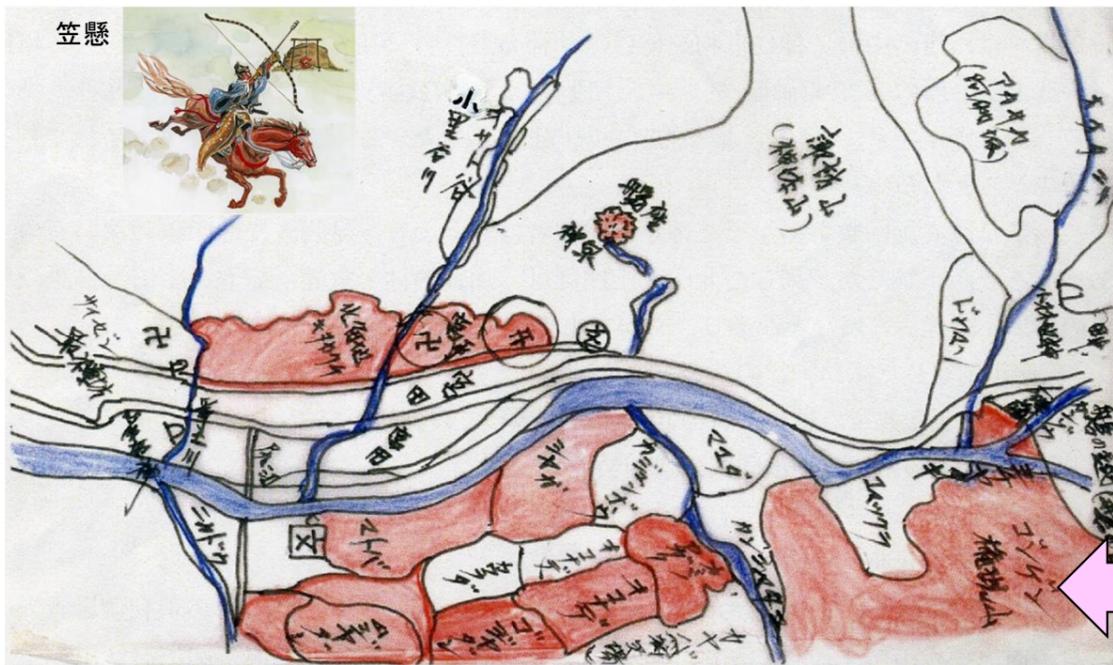
城山山麓の宮崎(別符)三郎の館は当時の小名程度の住まいとすれば、一辺が40m程度の屋敷で、西側は荒れ川の笹川を外堀に、南には大溝川の流れを堀とする、地名の「美の輪」「手取田」「辻の内」「宮谷」「一の坂の先端部」を敷地として、外回りを石垣と土塁によって囲まれた「築地の内」だったと考えられる。

屋敷内には、本屋、附属の米蔵、農耕納屋、下人小屋、所従屋敷が置かれ、南端の大溝川と笹川の合流点の淵尻の大岩には遺児の宮に伴って護衛してきた長井家が宮の無事と繁栄を祈った京都の岩清水八幡宮の分祀の八幡社を祠ったと伝えられている。出入口は南と西に屋倉門として置かれ、外部との連絡に使ったのだろう地形と基礎石があった。

時がたつとその大岩も河川改修や道路の拡張で削られ小さくなり、その脇に跡地から出土したという僧形八幡像と、戦国時代の15世紀の上杉と佐々軍の戦に「手取田」で打ち取られた武士の供養の五輪塔板碑(朝日町指定文化財)が納められている。



寿永元(1182)年8月末に以仁王の遺児の宮が到着した。話によれば、奈良の常興寺領での潜伏、北国への途中での近江高島辺りの平家追捕の手を逃れる二度の難の脱出もあり、安全を第一に考えた義仲の命により、街道と港に面した宮崎太郎館から、山の巡る別符の宮崎太郎三郎館を改築した行在所に移ったものと考えられる。



北陸宮

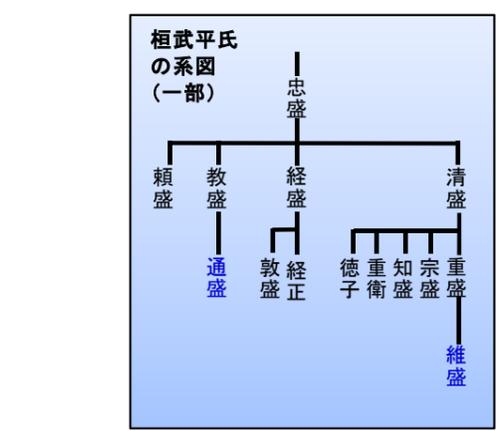
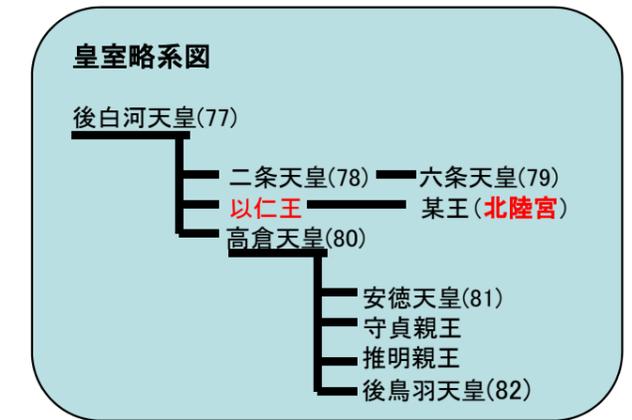
北陸宮(ほくろくのみや)
(永万元年(1165年) - 寛喜2年7月8日(1230年8月17日))
平安時代末期から鎌倉時代前期の皇族。
源義仲軍に挙兵の正当性として奉じられていた。
木曾宮・還俗宮・加賀宮・野依宮・嵯峨の今屋殿などとも呼ばれる。

入京とその後

寿永2年(1183年)7月に義仲が入京。この際に宮は同行せず加賀国に滞在していた。
義仲は親しかった俊堯僧正を介して、北陸宮を皇位継承者にすべきと後白河法皇に推挙したが、法皇からは完全に無視された。
結局8月20日に、法皇は安徳天皇の第四ノ宮(後鳥羽天皇)を皇位に就けた。
北陸宮は9月18日に京都へ入ったが、義仲のクーデタ前日の11月17日に北陸宮は法皇とともに滞在していた法住寺殿から逐電し、義仲滅亡後行方知れずと言いつた言われているが、宮崎三郎の護衛のもと、安全にそして静かな生活を宮崎で送った可能性が高い。

23. 帰洛

文治元年(1185年)11月に源頼朝の庇護で帰洛した。
後白河法皇に源姓下賜を求めたが、許されず、嵯峨野に住んで藤原宗家の娘を妻に迎えた。
土御門天皇の皇女を養女にし、持っていた所領の一所を譲ったという。寛喜2年(1230年)7月8日に薨去。



義仲、後白河法皇、源頼朝との対立～そして最期へ

⑩皇位継承問題への介入

後白河は天皇・神器の返還を平氏に求めたが、交渉は不調に終わった。やむを得ず、都に残っている高倉上皇の二人の皇子、三之宮(後の惟明親王)か四之宮(後の後鳥羽天皇)のいずれかを擁立することに決める。ところがこの際に義仲は今度の大功は自らが推戴してきた北陸宮の力であり、また平氏の悪政がなければ以仁王が即位していたはずなので以仁王の系統こそが正統な皇統として、北陸宮を即位させるよう比叡山の俊堯僧正を介して朝廷に執拗に申し立てた。

しかし天皇の皇子が二人もいるのに、それを無視して王の子にすぎない北陸宮を即位させるなど、皇統の永続性を大切にする朝廷が受け入れるはずもなかった。兼実が「王者の沙汰に至りては、人臣の最にあらず」と言うように、一介の武士が皇位継承問題に介入してくる事自体、後白河にすれば不快に感じたと思われる。朝廷では義仲を制するため御占が数度行なわれた結果、8月20日に四之宮(後鳥羽天皇)が踐祚(せんそ:先帝の崩御や譲位により天皇の位を継ぐこと)した。兄であるはずの三之宮が退けられたのは、後白河の寵妃・丹後局の夢が大きく作用したという。

後白河法皇 頼朝との和解～義仲の敵は、平氏から後白河法皇および頼朝へ

西国への義仲の出陣と入れ替わるように、朝廷に頼朝の申状が届く。内容は「平家横領の神社仏寺領の本社への返還」「平家横領の院宮諸家領の本主への返還」「降伏者は斬罪にしない」と言うもので、「一々の申状、義仲等に齊しからず」と朝廷を大いに喜ばせるものであった。
10月9日、後白河は頼朝を本位に復して赦免、14日には寿永二年十月宣旨を下して、東海・東山両道諸国の事実上の支配権を与える。

そうとは知らぬ義仲は、西国で苦戦を続けていた。そして義仲の耳に飛び込んできたのは、頼朝の弟が大将軍となり数万の兵を率いて上洛するという情報だった。驚いた義仲は平氏との戦いを切り上げて、15日に少数の軍勢で帰京する。20日、義仲は君を怨み奉る事二ヶ条として、頼朝の上洛を促した事、頼朝に寿永二年十月宣旨を下したことを挙げ、「生涯の遺恨」であると後白河に激烈な抗議をした。義仲は、頼朝追討の宣旨ないし御教書の発給、志田義広の平氏追討使への起用を要求する。

義仲の敵はすでに平氏ではなく頼朝に変わっていた。19日の源氏一族の会合では後白河を奉じて関東に出陣するという案を出し、26日には興福寺の衆徒に頼朝討伐の命が下された。しかし、前者は行家、源光長の猛反対で潰れ、後者も衆徒が承引しなかった。義仲の指揮下にあった京中守護軍は瓦解状態であり、義仲と行家の不和も公然のものだった。

⑪後白河法皇との 決裂

11月4日、源義経の軍が布和の関(不破の関)にまで達したことで、義仲は頼朝の軍と雌雄を決する覚悟を固める。一方、頼朝軍入京間近の報に力を得た後白河は、義仲を京都から放逐するため、義仲軍と対抗できる戦力の増強を図るようになる。義仲は義経の手勢が少数であれば入京を認めると妥協案を示すが、後白河は延暦寺や園城寺の協力をとりつけて僧兵や石投の浮浪民などをかき集め、堀や柵をめぐらせ法住寺殿の武装化を計った。さらに義仲陣営の近江源氏・摂津源氏・美濃源氏などを味方に引き入れて、数の上では義仲軍を凌いだ。

院側の武力の中心である行家は、重大な局面であったにもかかわらず平氏追討のため京を離れていたが、圧倒的優位に立ったと判断した後白河は義仲に対して最後通牒を行う。その内容は「ただちに平氏追討のため西下せよ。院宣に背いて頼朝軍と戦うのであれば、宣旨によらず義仲一身の資格で行え。もし京都に逗留するのなら、謀反と認める」という、義仲に弁解の余地を与えない厳しいものだった。

これに対して義仲は「君に背くつもりは全くない。頼朝軍が入京すれば戦わざるを得ないが、入京しないのであれば西国に下向する」と返答した。兼実は「義仲の申状は穏便なものであり、院中の御用心は法に過ぎ、王者の行いではない」と義仲を擁護している。義仲の返答に後白河がどう対応したのかは定かでないが、18日に後鳥羽天皇、守覚法親王、円恵法親王、天台座主・明雲が御所に入っており、義仲への武力攻撃の決意を固めたと思われる。



木曾義仲像(德音寺所蔵)

21.法住寺殿襲撃

11月19日、追い詰められた義仲は法住寺殿を襲撃する。院側は源光長・光経父子が奮戦したが、義仲軍の決死の猛攻の前に大敗した。義仲の士卒は、御所から脱出しようとした後白河を捕縛して歓喜の声を上げた。義仲は後白河を五条東洞院の摂政邸に幽閉する。この戦闘により天台座主の明雲や後白河の皇子である円恵法親王が戦死した。兼実は「未だ貴種高僧のかくの如き難に遭ふを聞かず」と慨嘆している。義仲は天台宗の最高の地位にある僧の明雲の首を「そんな者が何だ」と川に投げ捨てたという。20日、義仲は五条河原に源光長以下百余の首をさらした。

11月21日、義仲は松殿基房(前関白)と連携して「世間の事松殿に申し合はせ、毎事沙汰を致すべし」と命じ、22日、基房の子・師家を内大臣・摂政とする傀儡政権を樹立した。

11月28日、新摂政・師家が下文を出し、前摂政・基通の家領八十余所を義仲に与えることが決まり、中納言・藤原朝方以下43人が解官された。12月1日、義仲は院御厩別当となり、左馬頭を合わせて軍事の全権を掌握する。10日には源頼朝追討の院庁下文を発給させ、形式的には官軍の体裁を整えた。

22.頼朝軍との戦い～最期

寿永3年(1184年)1月6日、鎌倉軍が墨俣を越えて美濃へ入ったという噂を聞いて、義仲は大いに畏怖する。15日には自らを征東大将軍に任命させた。播磨国の平氏との和睦工作を続け、後白河を伴って北国や近江への下向を図るが断念。まもなく源範頼、源義経率いる鎌倉軍が到着。義仲は京都の防備を固めて鎌倉軍との開戦に及んだが、法皇幽閉にはじまる一連の暴挙のため、義仲軍の兵士は次々と敵前逃亡し、宇治川や瀬田での戦いに惨敗した。義仲自身も20日、近江国栗津(滋賀県大津市)で討ち死にした(栗津の戦い)享年31。

義仲が戦死したとき嫡子・義高は頼朝の娘・大姫の婿として鎌倉にいたが、逃亡を図って討たれ、義仲の家系は絶えた？

義重は、何処に？(今後の研究テーマの一つか)

